

---

# 神様なんかいない

冴河冴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様なんかいない

### 【Zコード】

Z0404E

### 【作者名】

沢河沢

### 【あらすじ】

神はいるのかいないのか……おそらく誰もが一度は抱いた疑問だろう。いふとしたら何を思つて人を作ったのか、何を思つて世界を見ているのか……。中学生の頭脳の、限界に挑む(?) \* 改定したので、よろしかつたら一度お読みになつた方も、どうぞ\*

## プロローグ

中高一貫校の、空手部の部室。

「神様つて、いると思う」

幹弘先輩がそんなことを言つとは、彼女 桜井ナナにとつて意外なことだった。神よりも自分を信じて生きていそうな人みえるのだけど。

「……」の間神様なんていないつて結論出したばつかなんですけど

ナナはしばらくの沈黙の後訊いた。

「なんで先輩はそう思うんですか」

「だつて現にイエス・キリストは生まれてるしさ。」

仏教の神かと思ったのに。少々驚いた顔をする。まあキリスト教の学校の生徒なんだからイエスの話が出るのもわからないでもないが。

「キリスト教ですか。……先輩がそう思つのは否定できませんけど、あれつて御言葉がいちいち人間本位なんですよね。旧約聖書はイエスが生まれる前の話だから仕方ないにしも。……じゃあ、もうちよつと考えてみますよ。」

「ん。じゃあな」

\*

ナナはテスト勉強をさぼつてそれについて考えていた。

6日後に行われた学年末テストが、国語を除いて全教科20点ずつ点が下がつたのは言つまでもない。音楽にいたつてはアルトパートなのにソプラノパートを歌うという笑えない冗談みたいなことをしてしまった。

今はなにやら聖書のあら探しをしている。キリスト教学校の生徒とは思えないほどの聖書の冒流ぶりだった。

創世記 天地の創造。旧約聖書1ページ。光とか水とか動物とか作る話。

「これって動植物の進化の過程無視してる。恐竜の化石とかねビツ  
やつて説明するんだろ?」

ナナはそんなことを言いながらページをめくる。不審者のよつて  
もある。

次、創世記 アダムの系図。旧約聖書7ページ。

「九百年とか平然と生きてる人の話されても信じよつがないんです  
けど」

ナナは面倒そうな顔をして聖書を閉じた。やる気が失せたようだ。  
しばらく所在無さそうにした後、不意に本を読みはじめた。

なにやら戦争の本のようだった。

しばらく読み終わったその本を眺めて、ナナはばたりとベッドに倒れこんだ。そして小さくひとりごちた。

「神様ってなんなんだろう」

携帯を充電器からとつて、アドレス帳を開く。  
あの先輩に、メールを送るようだ。親指を驚くべき速さで動かし、  
文字を打ち込んでいく。

『神様って、どんな人だと思いますか』

ぱたん、と携帯を閉じ、ベッドの上に一緒になつて転がる。携帯ストラップを指で弄びながら、返信を待つ。

余談だが、ビジネストークのメールで、返信が早い人ほど自分に自信を持っている人が多いのだそうだ。まあそれは状況によつてあつて、いど左右されるものだが。

「Y o u , v e g o t m a i l !」

ナナは起き上がりつてから携帯を拾い、ぱかつ、と開いた。1分で返信するなんて、先輩の指の構造が見たいとか暇人とかなんとかぶつぶつといつづメールを見た。

『全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人。運命も何もかもを決めることができる存在』

即座に、と言つても遅々とした指使いでだが、それに返信する。

『いるんですけど、そんな人。というより、神様つて人なんですか』

『それができるから神様なんだよ。いや、逆だね。神様だからそれができるんだよ。神様は自分に似せて人を作つたから、まあ人とは似た形の存在なんだろうね』

ナナはそれを見つめ、顔をしかめる。それから迷うようになんども打ち直しながら返信した。

『それって、神という大きな存在に自分たちが似ていると思いたい人間のエゴなんぢやないですか』

ばたりとまたベッドに倒れこみ、うつ伏せになる。

それからまた小さくひとりごちた。ひとりごとが多い中学生のようだ。

「戦争だつて独裁政権だつて、人種差別や動物虐待だつてそうやって起きたんぢやないのかよ…そもそも動物虐待っていう呼び方が差別じやねえのかよ」

知つてはならないものを見てしまつたかのように、布団をばふつと頭からかぶる。人がきれいなものだとでも思つていたかのようなそぶりだ。

「Y o u - v e g o t m a i l !」

返信がきたが、携帯を手に取る気配は見せない。

ナナは、しばらくそうしていた。

\*

ナナはどこからか紙を持ってきて、シャーペンを走らせていた。今度は驚くべき速さで。そもそも答えなんかないのかもしれないのだが、そんなことはどうでもいいらしい。

まあたしかに、紙に書き出したほうが上手く考えがまとまる」ともあるだろう。

まず紙の端に、『神』全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人と似た形のもの。絶対の存在。運命や偶然さえもつかさどる』と書いた。その横に、神はいると仮定する、と付け足す。

ナナは唇を噛んだ。紙の中央上のところに、人を作った理由と書く。ナナはどんどん書き出していく。

気まぐれ、気分、自分のクローン計画、実験、人がもたらす破壊を見たかった。人を滅ぼして破壊衝動を満たす＝今すぐ消されるかもしれない。

そうして一人、禅問答を繰り返す。きりがない言葉の数々。ときには、神の定義　全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人と似た形のもの。絶対の存在。運命や偶然さえもつかさどる　と矛盾するものも出たので、それは上から線を引き消す。

と、そこで急に手が止まる。

「そんなわけ、ないじゃん…そんなのって、ない」

その目は、愛の対象を人に求めたという、その文章を睨むように見ていた。

## 願望（前書き）

相変わらず暗い…  
こいつ大丈夫なのか？

\*

ナナは、一枚目の紙をもつてきた。今度は別のこととを書くようだ。

タイトルは、『人のエゴ』。

『祈れば叶う』『都合主義』『人の願望』

『神に似せて作られた人間』『自分たちは優れている』『自惚れのすえの自己満足』

『神』という概念は人が作ったものである。『自己満足の産物』

『神』とは幻想。自分勝手な願望の根拠のために作られたもの

ナナは、脳内で推敲しながら最後の一文を書いた。

『結論』『矛盾を誤魔化しきつて神を信じれば、楽で幸せ。無責任で欲深い人間たちの心の中に、神という名の欲望はいる』

それを書いて、ナナは机に突っ伏した。

本人だつて気付いてない振りこそしているが、おそらくはわかっているだろう。自分がそうやってひねくれた考え方ばかりをするから、中1に見えないとか、何考へてんのかわかんないとか、素直になれといわれることくらい。

ナナはゆっくり寝息を立て始めた。

\*

夢から醒めたナナは、汗を拭いながら机から離れた。頬についた、なにかのあとをなぞつている。首をひねつて、キッチンで牛乳をコップに注いで一息で飲む。

夢の中、うなされていたことなどすっかり忘れてたかのよう、元のクッキーを焼く準備を始めた。

薄力粉170gと強力粉70g、砂糖は目分量。それらを別々に

ふるいにかけておく。とき卵1個分とバター60g バニラエッセンス少々。

バターと砂糖を白くなるまで練り、卵を加え、バニラエッセンスをたらす。粉類をさっくり混ぜ込み、一時間寝かす。ナナの思考は、また「神様問題」に戻つていった。

ある昼下がり。ナナはなんとなく外を歩いていた。まだ答えを出せないでいた『神様問題』。それについて一人悶々と悩んでいた。それでなのか、何を思ったのか男友達…みーちゃんに聞いてみようとしていた。神様が、いるか否か、と。

\*

学校への、30分ほどの道のりの通学路。ナナは唐突に切り出した。

「神様つていると思づ?」

急に訊かれたせいか、ちょっと迷つてみーちゃんは答えた。  
「わかんない。でも…………いたらしいなつて、思う。」

「へーえ? なんで?」

「……なんとなーく」

みーちゃんは…ちなみにこれは苗崎の頭文字だ…そう言いながら笑つた。

「適当だね」

そう言つてナナもちよつと笑つた。

ナナは、前を見た。

「みーちゃん」

ナナは少し間をおいてから、続けた。

「神様がいようといまいと、それは大した問題じゃないのかもしない。神様がいるから希望を持つ、だから頼るなんていう生き方は私の性には合わないよ。私ってそういうキャラでしょ? それに誰も

見ていなくても神様が見ているからいいことをするなんて根本的に間違ってるし、そんな風に誰かに優しくしたくないし、自分もそうされたくない。」

ナナは、そういうミーちゃんを見た。

「そつか。なんか知らんけど、それでいいんじやん」

「ありがと」

どこかに残った後ろめたさは無視して、ナナは歩き続けた。

一週間が経つた。

ナナがキリスト教学校に入つて聖書の存在を知つたのは小学一年生のとき…かれこれ七、八年前だ。月曜日から金曜日まで学校で贊美歌を歌つて、聖書を読んで祈る。

友達に誘われて日曜日に教会に行つたこともあるけれど、それも一、二回だけで続きはしなかつた。

小さい時から聖書に触れる機会ならいくらでもあつたけれど、いまだにナナはイエスとか神とか、そういうものを信じてはいない。

\*

自分の家でひとり、寝たきりになつていた曾祖母。

物が散乱して酷く汚く、生ゴミの臭いが鼻をついた。いつのだかわからないマヨネーズの容器が転がつていて、シンクには汚れた皿が洗われずに載つていた。

部屋の隅に埃をかぶつた聖書が落ちていて、そしてそんななかにナナの曾祖母は寝ていた。ナナが行つても、曾孫であることはおろか、子供だということも、女子だということもわからなかつた。憶えていなかつたんだろうし、見えちゃいなかつたんだろうし、話もほとんど聞こえていなかつただろう。

しばらくして曾祖母は入院した。

もう誰かが来た、ということすらわからなくなつていた。乱れた服はそのままで、食べかすがそこらじゅうについて、焦点が定まらない目で天井を見ていた。

小4のナナにとってそんな曾祖母は気持ち悪いだけだった。

そして人が脆く、儚い物だと思い知った。汚らわしく、切なく、苦しく、悲しく、虚しく、痛ましく、気持ち悪く。そんな感情を一度に味わった。

曾祖母と会うことは…否、見ることは、ナナにとって苦痛でしかなかったし、今も思いしたいことではない。自分の未来をそこに見るからか、哀れんで悲しむべきところをそうは思えない自分が嫌なのか、曾祖母を汚らしく思うからなのか、苦痛の理由は、よくわからぬようだが。

その後曾祖母は死んだ。ナナは泣きもしなかった。まともな思考力があれば、神を信じ続けていたであろう曾祖母の成れ果てだった。

\*

ナナの手元には友達に貰つた本が置いてある。……キリスト教の教えの本だ。ナナは釈然としない面持ちでそれをみていた。結論は、自分に恥じないようにする…は、完全なる答えではないのではないか。わだかまりの原因はそれだった。

ナナは迷つていた。結論を出すのを急ぎすぎたのかもしれない。やつつけ仕事で適当に済ませようとしたかかもしれない。

だからナナはもう一度考え方を直してみることにした。

友達が貸してくれた本は、どれもまつとうなことばかりが書かれていた。

ナナが自分が持つていない、優しさと気遣いを持つ彼女といふとどうしようもない劣等感に襲われるというだけだ。自分より勝っている存在に囲まれて、毎日、どんな時も空虚な感じになるだけだ。何も彼女に限つたことではないし、勿論彼女のせいでもない。彼女はナナを想つて貸してくれた、それはわかってる。

ナナは結局それらを全部読んだ。

神を信じて成功した人たちの話と、神を信じるためにはどうすればいいかという話だつた。そしてそれらはナナがいかにひねくれているかを証明していた。

もしも賢い子だつたら、なんでもかんでも真実を知るうとはしなかつただろう。知らないほうが幸せなこともあるのだから。まつすぐな子だつたら、なんでもかんでも言葉の裏を読もうとするようなことはしなかつただろう。テレビとか、聖書とか、童話とか、それこそこの本とか……人の心からの、言葉とか  
神を信じれば幸せになれるとか言うけれど、神を信じていなくても幸せな人はいる。それに幸せになりたいからという理由で何かを信じるというのは不純すぎるし、意味が無いんじゃないかと思つてしまつ。

ひねくれてるからこんな考え方しかできないのも、こんな考え方は世間一般ではないということもわかっているんだけど。神を信じられないのも、人を信じられないのも、ナナ自身の性格とひねくれ加減のせいなのはわかりきつたことだった。

もしも神を信じられるなら、きっとそのほうが楽なのだろう。

誰も疑わずに、決して消えない希望を持ち、絶対裏切らない友を得て、罪深くても愛してくれる存在がいて。

そんな風になれたら……思うだけでもいい、そう思えれば、きっと人生はもっと楽しくて、幸せなものだろう。

だから信じたいんだ。

だから信じよう試みるんだ。

神様がいるとかいないとか、本当はどういちでもいい。こんな日々から抜け出したいだけ。今日をやり過ごすのにビックリかって言うとその方が楽だから、神様を信じて、未来があるっていうことにしておく。

終わってるんだ。すさんでいるんだよ。

何やつたつて変わらないし、何知つたつて意味無いんだよ。

壊れすぎた人に、救いは来ない。『普通』にはなれないんだ。罰を受けて死ぬ筈だったのに生きてもらつてんだよ。

「わかってるよ」  
「わかってるよ」

…………わかってるの？

ナナは多分、わかっていない。

## 結論（論書類）

最終話ではありません

『日々は限りなく空虚で、罪にまみれている。』

ナナは原稿用紙を持ってきて、そう書き始めた。

『Iのまま死んでも構わないと思つほど、生きるのは辛いものだ。罪を償うためには許されないことだけれど。Iの人生とこう罰を受けなければならないから。

人はきっと……否、私はきっと、そんな風に生きていいくことになつてゐるんだね。生まれたとき既に罪を犯して、日々自分の無力さに泣いて、今日も虚しさに溺れて、明日もまた破壊して。

罪悪感と疎外感と、孤独感と違和感と、既視感と悲壮感。そんなものにさいなまれて。

私が生きることに意味なんか無くて、悲しみ虚しさ e . t . c . の十一字で表せる人生だ。誰かが人が生まれたのには理由があるつて言つてたけど、それは違う。

私の存在に意味は無い。私の存在に理由は無い。

幼稚園児の頃からどうして死ねないのか悩んでいた私は、そもそも生まれるはずじゃなかつたのだ。生まれる筈じやなかつたのだから、死ねるわけも無い。誰も殺してはくれなかつたのは、それが私に対する罰だから。誰も助けてくれなかつたのは、私が全てを拒んだから。誰も信じられないのは、それが私のしたことだから。

学校が楽しかつたことなんて一度も無い。

家が平和だつたことなんか一度も無い。

生きてよかつたことなんか一つも無い。それだつて私に『えられた罰だから。わかつて。だからもう全部、諦めるんだ。』

ナナは一気に書き上げると、その紙を一警し、丸めてゴミ箱に放り込んだ。そのまま倒れこむようにベットに突つ伏した。

## 結論（後書き）

次回、最初に『私』と話していた先輩視点です

## 後日談（前書き）

最終話、先輩視点です

「眠い」

幹弘 ナナの先輩

今日は金曜日。学校に行かなくてはならない。

今日は部活があるし、顔出してから帰ろう。先々週と先週は休んだし、空手をやりたいし。なんてぶつぶつ言いながら幹弘は着替える。

「俺はいいけど……あいつ、生きてて楽しいのかな……」

そんな思いをふり払って、鞄を持って…朝食は食べないらしい…

家を出た。

\*

「中段の蹴り、始め！」

「一！」

構えの姿勢から腿をあげ、すばやく脚を振り切る。脚をつきながら拳を繰り出す。

「らあっ！」

「一！」

身体を風が抜けるような感覚。何かが流れ落ちるような快感。靄が消え、開ける視界

「ああ、やばい。俺、やっぱ空手好きだ！」

幹弘はそんなことをいいながら練習に励む。空手部には、不審者の卵が多いらしい。

何度も恍惚としたように、架空の相手と対峙する。

「やめーーっ！…構えて。中段の回し蹴り、始め！」  
構えから腰をひねり腿を上げ、そのまま脚を解き放つ。脚をつき、  
拳で風を切る。

「うあっ！」

と、その時。

あの声が、 桜井ナナの、 声が、 弱々しく、 張りのないものになつている。次もその次も。

「桜井……？」

それに気付いた幹弘のつぶやきは、 小やく靈むように消えた。

\*

練習が終わり、部室でだべっていた。そんななか、何も言わず部屋を出て行くナナ。

練習中も、その後も、自分から幹弘に、 否、誰にも、 話しかけようとはしなかった。

その目は虚ろで、暗い雰囲気だった。まるで、生きてこじとけのものが辛いかのようだ。

「何もなかつたなんてことは絶対ない。あいつは何でも顔に出すがなんだ。」

なにがあつたんだ？。と、首をひねるが幹弘には皆わからな  
い。

「なあ……どうしたんだ……なにがあつた？」

「いえ、別に。さよなら」

幹弘が呼び止める間もなく、ナナは出て行つた。

なにも信じじうことができない。なにも肯定できない。果ては神まで自己満足の産物といった少女。

そんな桜井ナナの、成れ果てだつた。

## 後日談（後書き）

ここまで読んでいただけて、感謝感激です！  
どうもありがとうございました

えと、直した方がいいとか、つまらなかつたのひとつとも、お願いします、感想・評価をしてください。糧になります。すゝく書びます。

これからも執筆を続けてこります。よかつたらどちらもお読みください。…宣伝かよ（笑）

最後に、本当にどうもありがとうございました！

気に入つていただけたなら、嬉しいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0404e/>

---

神様なんかいない

2010年10月8日15時31分発行